海の輝きワード

宮尾　美明

今年の年賀状の中に思いがけない人からのものがあった。

「僕も結婚しました」

カップルのはじけるような笑顔のバックにそんな文字が躍っていた。館山浩志の名前があった。あの浩志が結婚してこんな幸せそうな表情をしている。一気に心が溶け出しそうな喜びが広がってきた。

目の前の小野浦の海の輝きは何とも表現できない輝きに満たされていた。まさにダイヤモンドをちりばめたような輝きが、海面全体に折しも寄せる波に乗って一斉にこちらに向かってくるようだった。岩の上で一人海を見つめて立っていると、そのまま吸い込まれていきそうな感じだった。私は間もなく出てくる美術部の生徒たちを待っていた。保護者のお母さんたちは多分まだ眠っているだろう。小野浦の青年の家の関係者が、青年の家から出てくるのを確かめると、私は岩場を下りた。同時に一斉に建物から生徒たちが広場に集まってきた。

「美術部で合宿をやろうよ」

中学校の文化祭で美術部の作品の発表だけではおもしろくないと言い出して、あろう事か

「演劇をやろうよ」

言い出すものが出てきた。運動部の華やかな活動の影で文化部の存在は薄い。一日目の体育祭に燃える意気込みは半端ではないのに文化祭の発表は合唱コンクールを覗いては地味なものが多かった。運動部が馬鹿にするわけではないが、どうしても低く見られるのは中学校の運動第一、運動できない生徒の受け皿の文化部という考え方が抜けきらないせいもあった。五十名近くの学校一の部員数を誇っていた美術部が、ここで何かやらなきゃ示しがつかないという意気込みもあったし、当時生徒会会長の浩志と、その年の優秀な生徒たちがなぜか美術部に集まった意地もあった。

演劇のための合宿をやろうよの声は日ごと高くなり、顧問の私もそうせざるを得ない気持ちになっていた。演劇の出し物は、美術に関係した内容と言うことで、「マリーローランサンの生涯」ということに決まった。脚本は勿論国語の教師で美術部の顧問であった私の仕事に決まった。

脚本も無事完了し合宿の申し出を校長に出しに行ったが、却下されてしまった。運動部なら難なく出る許可が出なかったのである。宿泊を伴う部活の許可は出せないと言うことだった。残されたただ一つの方法は、生徒たちの親が企画して、それに先生も参加という形なら許可が出せるというものだった。

「じゃあ私たちが」

生徒たちの親が立ち上がって、バスの手配から宿泊の手配までみんなやっていただいた。その結果やってこられた合宿だった。

勿論演劇の練習も繰り返し繰り返しやったのは間違いなかったが、遠い記憶の中から呼び戻されるのは、練習が終わり親と生徒と、一緒にやってきた生徒たちの弟妹とのレクレーションだった。ハンカチ落としを世代を超えて大笑いのうちに夜が更けていったのをはっきりと覚えている。そしてもう一つ、水泳は禁止されていたので炎天下の海で生徒たちと貝拾いをしたり、水辺で遊んだことだった。焦げるように熱い砂浜で、きゃっきゃっ若い生徒たちに混じってふと気がつくと大人は私一人。あれっ！お母さんたちは？初め日傘をさして浜辺にいたお母さんたちはみんな引き払って私だけが生徒と海岸でじりじりと照らされていた。

「先生は生徒たちと」

そう言って海をあとにしたお母さんたちは、遙か向こうの海の家で豪快にビールで乾杯をしていたのだ。

きらきらとかがやく海。怖さなど何も知らない若さに満ちた生徒たち。あの海の輝きを思い出すと、いつも胸が熱くなる。

そしてついにやってきた文化祭の舞台。女の子はみんな化粧をして見違えるように美しくなり、ライトを浴びながら、中学校始まって以来の文化祭での大一番の演劇は、大きな話題の中心として語り継がれることになった。いろいろな意味で意義ある演劇だった。中でも笑いがわき上がる楽しい話題は、浩志がモテモテ男のピカ

ソを演じたことだった。
「生涯一番モテた記憶があるとしたら、この場面だよね」
浩志は真っ赤になりながら嬉しそうに笑っていたのが忘れることができない。
そして思い出は思い出になって記憶の彼方に消えていく。誰からも期待され優秀な成績の浩志が。推薦で進んだ有名高を辞めたと人づてに聞こえてきた。一体何があったんだろう。彼ほど人生の王道を進める人などいないだろうと思っていた私はショックを受けた。やがて学校を辞めて大阪の音楽学校にいったという話が聞こえてきた。そういえば音楽が大好きだったから、好きな事をやりたかったんだろう。単純にそう思っていた。人柄が良く本当に誰にも優しい彼には現実の荒波が耐え切れなかったこともあったのだろう。でも、好きな道に進んだのだからきっと良かったに違いない。そう思っていた。
進んだ高校を辞めた頃から浩志とは年賀状のつきあいさえも途切れていた。
そうしてある昼下がり、コンビニで買い物をしていると、突然
「先生」
懐かしい声だった。
「浩志?」
全然変わっていなかった。噂に聞いていた暗い表情とはかけ離れた健康に満ちた青年の顔だった。
「今、どこの学校?」
とんちんかんな私の質問に満面の笑顔で、
「嫌だなあ、先生、もう僕も三十過ぎですよ」
「えっ本当?今何してるの?」
「ご覧の通り介護の仕事です」
初めて浩志の名前入りの制服を見た。
「頑張ってるね」
私も眩しい太陽に目を細めながら言った。
「先生はまだ学校?」
「そう」
退職し再任用も終わり非常勤で勤めていた。

「先生働き過ぎだよ。無理しないでよ。お願いだから僕のところに来ないでよ。先生のそんな姿見たくないから」

そう言うと、もう一人の仲間とさっさと車に戻っていった。意味が分かってくると、私は思わずくそっ！と地団駄を踏んでいた。もう！と独り言を言いながらなぜか心の底から笑えてきた。そうかいろんな曲り道のあとで、あんなすがすがしい顔で笑える浩志に会えるなどと思ってもみなかった。伝わってくる噂はみんな暗いものだったから、いつか話題にも上らなくなっていた。でも浩志は浩志だった。もがきながら自分の道を見つけ出したのだろう。彼だったら他の人が不可能と思えることだってきっとやり通していくだろう。苦しい道のりをきっと乗り越えてきたのだろう。そんな気配などまるでなかったが。浩志は、あの夏の海の輝きのように澄み切った夢いっぱいの笑顔だった。

年賀状の浩志を見ながら改めてあの忘れられない一夏を思ってみた。私自身だって実にいろいろなことがあのあと、次々と押し寄せてきた。人生の荒波に飲み込まれそうになった事もあった。あの夏のメンバーも、メンバーのお母さんたちにも同じような事が何度もやってきたに違いない。でもあの一夏のあの海の輝きを思い出すと、確かにそこには紛れもなく輝く青春があった。そのことを今も誇りをもって思い出せるし、これから歩んでいく道の大きな力になることは間違いないと思った。あの輝く一夏の海を思い出すと、

「乗り越えられないものは一つもないよ。さあ一歩前に歩み出そうよ」

いつもそっと背を押されているようで。